

文字摺通信

第 107 号
2026年 3月 1日
発行:文字摺歴史文化社



～歌は世につれ、世は歌につれ～



昭和の歴史は歌謡曲の歴史

第5回 昭和5年 ふくしま その3 山田耕筰の父は、母は？

昭和5年の夏、古関裕而はコロムビアから「専属の作曲家になってほしい」との知らせを受けました。音楽家への道を模索していた裕而は、この年の6月に結婚していた金子（きんこ）と相談し、早速状況することに決めました。「それにしても、なぜ、私に？」という疑問をコロムビアの方に尋ねると、コロムビアの顧問をしていた山田耕筰の推薦だったことがわかりました。

それにしても、山田耕筰は何故、古関裕而を推薦してくれたのでしょうか？いくつかその理由が考えられます。

第一に、裕而は福島商業学校時代から山田耕筰を心の師と仰ぎ、彼の著書を読んで音楽理論の勉強をし、卒業してからは自作の曲の楽譜を山田耕筰に送り続け、山田はきちんとそれを読み、裕而の才能を認め、返信をよこすなど、親交がありました。

第二に、当時のレコード業界の事情もありました。昭和4年日本ビクターが発売した「東京行進曲」（作詞西條八十、作曲中山晋平、歌唱佐藤千夜子）が25万枚の大ヒット曲となりました。そこで日本コロムビアやポリドールなどレコード各社は競って作曲家、作詞家を囲っておく必要が出たのです。若い、才能のある作曲家を青田刈りする必要があったのです。この年1月に新聞発表のあった国際作曲コンクール入賞の古関裕而に白羽の矢が立ったのです。

第三に、これが一番だと思うのですが、山田耕筰が福島藩に大きなゆかりがあったことです。彼の自伝『若き日の狂詩曲』に「悲しき母」という一節があります。長いのですが引用します。

「母は板倉の藩士高橋家に生れ、藩きっての美貌の持主であり、「目玉の高橋」と呼ばれて、魅力ある、美しい眼をしていたそうである。はじめは「きさ」後に「久」と変えた。藩主板倉公のお姫さまが同名だったので。

母の父は板倉藩の目附役を勤め、母は小さいときからお姫さまのお相手として、時折は、御殿に上った。それで、きさを久と変えたのだ。その頃の母は、なかなかのお茶目で、夏の日など日ごとのお習字を泳ぎに変え、手習の草紙を、いつも阿武隈の流れに浸して、さも習字を励んだかのような顔をして家へ戻った。泳ぎは特に得意だったとか、死ぬ日まで三十一文字を書き続けた、歯の抜けきった祖母が、ほおずきを吹くような口をしながら、そんな事を話してくれた。

そのうち母は、同藩の加藤家に嫁した。一女を挙げたが、生後わずかで死んでしまった。夫もまた、武田耕雲斎との戦いに出て陣没した。母は若い後家となって里へ帰ってきた。

その頃の内戦の様子は、よく母から聞かされ、子供心に驚異の目を瞠^{みは}ったものだ。板倉藩は国替えの悲運に遭い、福島から三河に移された。母も父母兄妹と共に、月余にわたる苦難と悲運を